GM 鶴牧-3 環の会

第 23 回クラシックを楽しむ会

2015 年 7 月 19 日（日）18:00～21:30

歌劇「ランメルモールのルチア」（ドニゼッティ）

会場等：　ミラノ・スカラ座（ライブ収録）
　　1992 年（5 月 14 日）
楽団等：　ミラノ・スカラ座管弦楽団、同合唱団
指揮　：　ステファノ・ランザーニ
演出・装置・衣装　：　ピエラッリ
出演　：　マリエッラ・デヴィーア（ルチア）
　　ヴィンチェンツォ・ラ・スコーラ（エドガルド）
　　レナート・ブルソン（エンリーコ）
　　カルロ・コロンバーラ（ライモンド）
　　マルコ・ベルティ（アルトゥーロ）
　　エルネスト・ガヴァッツィ（ノルマンノ）
　　フロリアーナ・ソヴィッラ（アリーザ）
　　その他

スカラ座　1992 年の本公演ポスター

あらすじ

17 世紀末のスコットランドが舞台。兄エンリーコの政略のため無理やり結婚させられた妹のルチアが花婿アルトゥーロを刺し殺して発狂。ルチアの不実を責めた恋人エドガルドもルチアの死と愛の真実を知ってルチアの後を追う悲しい物語。

マリエッラ・デヴィーア（1990）

聴きどころみどころ

ドニゼッティの最高傑作でベルカント・オペラの代表的作品。一番の聴きどころは正気を失った主人公ルチアが延々と１７分強！も超絶技巧の難しいコロラトゥーラで歌い続ける**「狂乱の場」**。六重唱**「このような瞬間に私を邪魔するのは誰だ」**は同時に歌っているのにそれぞれの気持ちが伝わる名曲。最後のシーンでエドガルドが歌う 2 つのアリアもテノールの名アリアとして有名。

１９世紀前半「狂乱オペラ」が多く作られたが、この「狂乱の場」は最高傑作でまさに圧巻。ルチアは華麗な声の技巧とドラマティックな歌い方、演技が要求される難役として有名。

ミラノ・スカラ座について

ドゥオーモ広場からヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世のガレリアを抜けるとスカラ広場。1964 年頃はスカラ座の前を路面電車が走っていた。現在はミラノゆかりのダ・ヴィンチ像の外側に落葉高木が植えられて景観が少し変わっている。

ガレリアを抜けるとミラノ・スカラ座（1964）

第 24 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**喜歌劇「メリー・ウィドゥ」（レハール）**
8 月 16 日（日） 17 時 30 分開場、18 時上映開始
　ウィーン・フォルクス・オーパー来日公演（2012 年 5 月、東京文化会館）
9 月以降は、サン・カルロ劇場の「オテロ」、ザルツブルク音楽祭の「ばらの騎士」、オペラ座バスチーユ劇場の「夢遊病の女」、パヴァロッティの「リゴレット」などを予定。

あらすじ

【時と場所】

17 世紀のスコットランド。名門ランメルモール家とレーヴェンスウッド家は親の代からの敵同士。ランメルモール家の当主エンリーコの妹ルチアは敵方レーヴェンスウッド家当主のエドガルドと密かに愛し合い、結婚の約束を交わしていた。

【登場人物】

ルチア（ソプラノ）　・・・ランメルモール家エンリーコの妹。一族の宿敵エドガルドと恋におちる
エドガルド（テノール）・・・レーヴェンスウッド家の当主。ランメルモール家との戦いに敗れて没落
エンリーコ（バリトン）・・・ランメルモール家の領主でレーヴェンスウッド城を奪った。ルチアの兄
ライモンド（バス）　・・・司祭でルチアの家庭教師。ルチアとエドガルドの恋の手助けをする
アルトゥーロ（バス）　・・・兄の政略のためルチアが結婚させられる相手
アリーサ（メゾ・ソプラノ）・・・ルチアの侍女
ノルマンノ（テノール）・・・エンリーコの忠臣の衛兵隊長

第 1 部「出発」

（全 1 幕）

レーヴェンスウッド城内。この城はランメルモール家の領主エンリーコがレーヴェンスウッド家のエドガルドの父を殺して奪ったもの。エンリーコは傾きかけた家運を救うため、妹ルチアを政略結婚させようとしている。衛兵隊長ノルマンノから、彼女が宿敵エドガルドと恋仲らしいと聞かされて激怒（**「激しい苦しみ」**）。

そのルチアは今日も城内で密かに恋人エドガルドを待っている（**「あたりは沈黙に閉ざされて」**）。現れたエドガルドは、間もなくフランスへ旅立つので、その前にエンリーコと和解して結婚の許しを得たい、と言うが、ルチアは、それはかえって逆効果だといましめる。エドガルドはエンリーコへの怒りが燃え上がり、ルチアは慰める（二重唱**「裏切られた両親の眠る墓の上で」**）。そして互いの指に指輪をはめる。

第 2 部「結婚の契約」

（第 1 幕）

エンリーコは偽のエドガルドの手紙をルチアに見せてエドガルドが裏切ったと思い込ませ、悲嘆にくれるルチアにアルトゥーロとの結婚を強要する。司祭でルチアの家庭教師ライモンドもルチアを説得して承諾させる。

大広間では新郎や客たちが花嫁を待っている。現れたルチアは結婚の誓約書に署名させられる。そこへエドガルドが現れ、ルチアの署名を見て逆上、2 人で交わした指輪を打ち捨て、呪いの言葉を投げつける（六重唱**「この瞬間邪魔するのは誰だ」**）。

（第 2 幕）

エンリーコが嵐をついてエドガルドの住まいを訪ね、2 人は未明にレーヴェンスウッド家の墓所での決闘を約束する。

一方、城内の大広間では旬欄豪華に結婚の祝宴が続くなか、ライモンドが一同にルチアが新婚の夫を殺して正気を失ったと知らせる。そこへ髪も乱れ血の気の失せたルチアが現れ、エドガルドとの愛の幻を歌い、やがて息絶える**（狂乱の場）**。

その頃、何も知らないエドガルドは、死を覚悟して墓でエンリーコを待っている（**「やがてこの世に別れを告げよう」**）。ところが現れたのは葬列の一群。ライモンドから、ルチアがエドガルドへの愛のために狂って死んだことを告げられ、絶望したエドガルドは、ルチアと天国で結ばれることを願って自ら死を選ぶ（**「おまえは昇天の翼をひろげた」**）。

参考

原作は実際に起きた事件がモデル

歌劇「ランメルモールのルチア」の原作はウォルター・スコットの歴史小説「ランマームーアの花嫁」（初版は 1819 年、右は小説の挿絵）。この小説は 17 世紀半ば、スコットランドの貴族ジェイムズ・ダルリンプル一家で 1669 年に実際に起きた事件に基づいている。ダルリンプルの娘ジャネット（?-1669）は親の意に沿わない男と婚約していた。それを知った両親は激怒し、無理やり別の男と結婚させた。結婚式の夜に悲劇が起き、ジャネットは精神に異常をきたしていてひと月後に亡くなった。なお、怪我を負った夫は回復して再婚、恋人を失った婚約者は一生独身を貫いた。

事件当時、17 世紀のスコットランド

1603 年、後継ぎのいないエリザベス 1 世の死で、メアリ・ステュアートの息子スコットランド王ジェームス 6 世がイングランド王位を継承した。同時に、その後の 1 世紀はスコットランド独自の王を失い、次に独自の議会も失って、イングランドに吸収されていった暗い時代である。清教徒革命の原因のひとつとされる 2 度の主教戦争をイングランドと戦い、続けてスコットランド内戦、クロムウェルによるスコットランド侵攻、更に清教徒革命が失敗して 1660 年王政復古、殺戮時代と呼ばれる残虐極まる長老派教会弾圧は 1688 年の名誉革命まで続き、その後も反乱が続いた。1707 年イングランド王国とスコットランド王国が合併してグレートブリテン王国が成立したが、これはスコットランドが最終的に独立を放棄した屈辱的な出来事だった。

名門貴族ダルリンプル

ジャネットの父ジェームズと母マーガレット

原作のモデルであるジャネットの父ジェイムズ･ダルリンプル（1619-1695）は法律家で政治家。スコットランドの初代ステア子爵である。彼の息子ジョン・ダルリンプル（彼女の兄弟）は、後にイングランド王国のスコットランド担当国務大臣・司法長官で初代ステア伯。彼は名誉革命期に起きた有名な極悪非道の「グレンコーの虐殺」首謀者。またグレートブリテン王国成立に重要な役割を果たした人物として歴史に名を留めている。

ウォルター･スコット（1771−1832）

スコットランドのエジンバラ生まれの詩人、作家。ロマン主義作家として歴史小説で名声を博し、イギリスで初めて存命中の人気作家となった。なお、本業の弁護士を辞めた後、スコットランド最高民事裁判所高級書記官を続けた。イギリスの初代准男爵。なお、伝統あるスコットランド銀行発行のすべての紙幣にスコットの肖像が使用されている。

彼の作品は、ドニゼッティの「ランメルモールのルチア」以外に、ロッシーニの「湖上の美人」やビゼーの「美しきパースの娘」などさまざまなオペラの原作となった。なお、歴史小説「アイヴァンホー」は歴史的な出来事に架空の主人公を取り入れる手法の元祖である。なお、歴史小説「ランマームーアの花嫁」は、創作上の都合で小説の舞台を 18 世紀はじめに移している。

オペラの舞台と実話の舞台

オペラの舞台=原作の舞台は、スコットランドの首都エジンバラの東南東に位置するなだらかなランマームーア丘陵とその近郊である。エジンバラ生まれのスコットはこの近郊に住み、実話の舞台の地方を旅行している。実話の舞台はエジンバラの南東、スコットランドの西南端（現在のサウス・エアシャー州とダンフリース・アンド・ガロウェイ州）。廃墟のボルドゥーン城にはジャネットの命日に血の付いたガウンをまとった彼女の幽霊が現れると伝えられている。